

第46回東北建築賞業績賞選考報告

選考委員長 相模 誓雄

業績名：江戸時代から伝わる大工技術の継承と発展 および伝統的な木割術・
規矩術による社寺建築の施工

受賞者：石川 吉登氏

石川吉登氏は、昭和51（1976）年に平茂寺立川流九代目を継承した大工棟梁です。平茂寺立川流初代佐々木嘉源治は、江戸時代の元禄年間（1688-1703）に三春藩領（福島県田村郡三春町）実澤村に移住して木匠を始めたとされています。二代目幸七の時、平茂寺立川流を名乗りました。江戸時代後期の天保年間（1830-1843）、四代目幸七忠則の時には、三春藩主に仕え、構武堂並びに御花畑御殿の造営に携わり、列士分、両帯刀を許されています。その技法は、七代目まで「秘伝口伝門外不出」とされていました。石川吉登氏は、佐々木家に弟子入りして修行を重ね、八代目幸七忠幸から免許皆伝を受け、九代目吉則吉登を名乗ることになりました。

石川吉登氏は、これまで大工棟梁として多くの寺社建築を手掛けてきました。その作品は、拠点としている福島県郡山市を中心に、東北地方から関東地方へ渡っています。福島県大沼郡会津美里町の岩代国一之宮「伊佐須美神社」では御用達職人として、平成元（1989）年に楼門を手掛け、焼失した本殿・幣殿・拝殿の再建に尽力しています。また、埼玉県日高市の「聖天院勝楽寺」でも御用達職人として、本堂・庫裡・中門・客殿・鐘楼堂を手掛け、令和6（2024）年には多宝塔を完成させました。この多宝塔は、石川吉登氏の大工棟梁として技術の到達点といっても過言ではありません。国宝の石山寺多宝塔（滋賀県大津市）を手本としており、過去の木匠に学ぶ姿勢は、一貫しています。また、多宝塔は、二重の塔で、円形平面の上層部に方形屋根をのせた、大変難しい木造建築ですが、組物の緻密さ、屋根の反りの美しさ、均整のとれた外観など、見事な出来栄です。

石川吉登氏の作品に特徴的なものの一つに彫刻があげられます。これは、流派の特徴でもあります。作品には中世的な簡素な墓股から豪華で複雑な丸彫の龍まで多様で豊富です。いずれも見事な出来栄です。また、伝統技法を継承するだけでなく、独自の創意工夫がなされています。例えば、組物の巻斗は、平面が正方形でしたが、スリムに見せるため、平面の一辺を6寸2分、もう一辺を7寸2分の長方形にしています。この改良に10年の歳月をかけています。

以上、石川吉登氏は、「1）地域の建築やまちなみ景観などの環境の保存・修復・再生・継承・新たな創造」などの視点において評価でき、東北建築賞業績賞に値する人物であると判断します。

第46回東北建築賞業績賞選考委員会

委員長：相模 誓雄

委員：浅里和茂、有川 智、浦部智義、村上早紀子、西川竜二、後藤伴延（常議員）